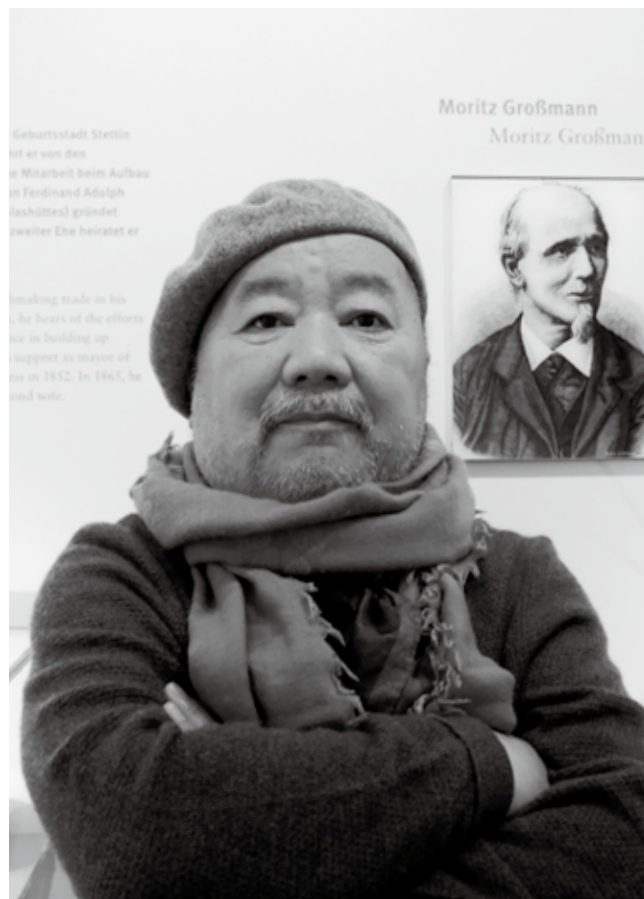


作詞家が考えていること 考えてきたこと

松山猛 (作詞家、作家)



「歌詞のモチーフは社会問題だったり……」と松山猛

松山猛

まつやまたけし 作家、作詞家、編集者。1946年、京都市生まれ。京都にてグラフィックデザイナーを経て、ザ・フォーク・クルセダーズ、サディスティック・ミカ・バンドなどの作詞を手がける。編集者、ライターとして雑誌「フルータス」「ポパイ」(共にマガジンハウス)などで活躍。「時計王」の異名も持つ。著書に『少年Mのイムジン河(木楽舎)』、松山猛の時計王 シリーズ、『それでも時は止まらない』(共に世界文化社)、『もう話してもいいかな』(小学館)など。バンド「松山猛 with ちゃんちゃんこカンパニー」でライブ活動も行う。 <https://www.youtube.com/@with5088>

1960年代、日本で初めてミリオンセラーとなった歌がある。
ザ・フォーク・クルセダーズの「帰って来たヨッパライ」。
その歌詞を書いた松山猛は、フォークルのメンバーで盟友の
加藤和彦と共にフォーク、ロック、歌謡曲を手がけ、
その後、サディスティック・ミカ・バンドの世界を創出し、世界進出も果たす。
現在はライブ活動も行い、自らの歌詞も歌う。
作詞家の50年以上の活動を追いかけて、その頭の中をのぞく。

京都時代、加藤和彦との出会いと 「帰って来たヨッパライ」

——作詞家は松山さんのプロフィールのひとつですが、どのようにして作詞家になったのかからお聞きします。1967年、ザ・フォーク・クルセダーズ(フォークル)の「帰って来たヨッパライ」がエポックだったのでしょうか？
松山猛(以下、松山) そうですね。京都で加藤和彦(1947〜2009年)が中心になって結成したフォークルが活動を始めた1965年から、一旦解散した67年あたりですね。「帰って来たヨッパライ」を僕とメンバーの北山修(ザ・フォーク・パロディ・ギャング)が歌詞を書いて、加藤が曲を書いたんだよね。67年の解散のときに300枚、自主製作でリリースしたアルバム『ハレンチ』に入っている。ジャケットのデザインも担当しました。

おらは死んじまっただ
おらは死んじまっただ
おらは死んじまっただ
天国に行っただ

ザ・フォーク・クルセダーズ

「帰ってきたヨッパライ」

作詞/ザ・フォーク・パロディ・ギャング

1967年

『ハレンチ』は200枚が売れ残ってしまった、ラジオ局をはじめとしてかけてくれるように頼んでまわりました。
——それで「ヨッパライ」が人気になり、レコード会社からリリースされて、日本初のミリオンセラーになる。歌詞のモチーフはどこにあったのでしょうか？

松山 まず社会問題でした。1960年代の半ば、モーターゼーションが急速に普及しはじめたところで、僕自身、交通事故を体験しています。小学校5年の夏の暑い日ですね。細い道でオートバイにはね飛ばされた。仲のよかった友達がスポーツカーを買ってもらったんだけど事故で死んでしまったということもあった。そんな状況を歌にしたわけだけど、凄惨なイメージにはしたくなくて……。どこかひょうきんな雰囲気にしたかったんですね。一人称は「おら」だし、飲酒運転で死んだのに天国でも飲み続けている、最後は追い出されて生き返るといふ。中国の故事「邯鄲の夢」のイメージもあったかな。
——社会問題を扱ってはいてもハードな社会派

ではないですね。

松山 いかにも社会派というのどうかと思っ
ていたし。もっとイヤだったのはおしやれな感
じでしたね。

「ヨッパライ」も含めて歌詞を書くようになったきつかけがもうひとつあったんですよ。ミカちゃんという友だちがいてね。ある日、家に遊びに行ったら、ヒョロッと背の高い男がいて。マ
ーチンのギターなんか持っている。それが加藤
和彦でした。その後、ふたりは結婚する。

——ミカさんはその後、サディスティック・ミカ・
バンドのボーカルになるわけですね。

松山 そうです。僕らが『ハレンチ』を作っ
ていたところで、ミカちゃんが、アメリカでは同年
代の若い連中が自分の言葉で歌を作っているん



自主制作されたザ・フォーク・クルセダーズの
アルバム『ハレンチ』(1967年)。